

カトリック 仙台教区報

2004年9月5日 No.159

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

仙台教区の今

仙台教区管理者 平賀 徹夫

去る7月19日、溝部司教様が高松教区の教区長として着座され、仙台教区は司教座空位となりました。司教座空位とは「部分教会(教区)における一致の見える根拠であり基礎である司教」を失い、教区の一歩の中心を欠いた事態ですから、これは教区の体をなさないことの上なく苦しい状態です。わたしたち仙台教区民とすれば一日も早く新しい司教が与えられるよう執拗に祈ることを心がけねばならないと思います。

しかし司教座空位だからといってそれは、神によって呼び集められた信仰共同体であるわたしたちの、信仰を表して生きる生き方(交わり)を深め、さらに強める活動を停滞させて良いという事にはつながりません。むしろ新司教を待ちながら信仰における一致を目指して行う活動の継続こそ、新司教をわたしたちのその交わりの中心にお迎えする最も良い準備となるのではないのでしょうか。

通常、つまり司教在位の場合、司教が教区の司牧および統治を果たしていくのを助ける機

関として、「司祭評議会」および「司牧評議会」が設置されます。仙台教区にも溝部司教様を中心にした評議会がありました。教会法によれば司教座空位となったときは「司祭評議会」も「司牧評議会」も「消滅」することになっており、その二つながら今はなくなりません。司祭評議会のメンバーは教区顧問として任命されておりましたので、今は、教区管理者とともに「教区顧問団」を構成し、新司教着任まで教区の世話の責任を負うことになっていきます。一方、「司牧評議会」は設置されてから三年目ですが、教区内4県からの信徒、司



着座式が終わって仙台から参加した人たちと

祭、修道者の代表が集まって話し合い、その一つの実りとして今年で2度開催された「教区の活性化のための研修会」を主催してきました。教区全体のつながりの表れであるこの会議と、小教区間ないし地区間の互いの交わりを起こし深める活動の緒となる研修会の動きを消滅させてしまうのは余りにも残念であり、何とかこの活動を継続できないかと話し合った結果、教区顧問会の承認もあって、「司牧評議会」ではなくとも「仙台教区宣教司牧を考える会」として教区全体のつながりを強めることを図り、また、交わりの場ともなる研修会を続けて行こうということになりました。今後いつそう、この会からの報告や「研修会」の案内や報告など各教会に届けられることになりましたので、倍旧によるしくお願いいたします。

もう一つ記しておくべき委員会があります。「人権を考える委員会」です。いのち、人権、人間の尊厳に関すること等、教会内や社会において多岐にわたって提起される問題・課題について、優先順位を定めて取り上げ、カトリック信仰に立脚した見解を提示することを目指す委員会です。9月から具体的な課題を取り扱うことにしています。この委員会にも関心を寄せていただきたいと思います。

塩と光

*カトリック信仰に、マリア崇敬が、確かに含まれています。『教会憲章』の最後の章は、「キリストと教会の神秘における神の母・処女聖マリアについて」です。*そこで聖母崇敬の基礎を説明しています。「神の恵みによって、キリストの神秘に参加した母、神の最も聖なる母として、子に次いで、すべての天使と人の上に高められたマリアが、特別な崇敬をもって教会から、たたえらるるの当然である。確かに、聖なる処女は、最古の時代から「神の母」という称号のもとに敬われ、信者はあらゆる危険と必要に際して、その保護を祈り求めつつ、そのもとに避難するのである」(66項)と、*マリアの信仰の生き方の基本は、天使ガブリエルへの返答に見事に示されています。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ1・38)と。*親類のエリザベトも、宣言しました。「主がおっしゃたことは、必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょ」(1・45)と。*マリアこそは、みことばに徹底して聴き従った方なので、まさにわたしたちの信仰の生き方の最もすばらしい模範なのです。

第32回カトリック宮城県大会

700名の参加で盛会に終わる

溝部司教を送る中庭に 感涙の長い

カトリック宮城県信徒連絡協議会主催の第32回カトリック宮城県大会が7月4日(日)仙台白百合学園口ザリオのマリア聖堂で開催されました。今年は仙台中央での開催の順にあたり、仙塩地区カトリック教会代表者合同会議のメンバーも実行委員会に加わり企画・準備にあたってきました。

テーマは2000年7月の溝部被選司教来仙から始まる「今、新生のときに、原点を求めて」を掲げ、司教様による継続した講演とミサを中心にした企画となりました。おりしも溝部司教



様が高松教区へ転任を命ぜられ、今回がまとめの講演とも言えるものとなりました。

講演の中で司教様はキリシタン時代の信徒や司祭の生き方を示し、また、「サンタ・マリアの御像はどこ」で有名なプチジャン神父の長崎信徒発見の物語に触れながら、司教なき問の心構えと信仰の深さについて諭されました。講演後プログラムは司教様に対する感謝送の式に変更され、県北や県南の代表から送る言葉や青少年代表から花束

「写真上」仙台中中央代表からお

餞別が手渡されました。司教様はお別れのあいさつとして、「東北の人の暖かさや勉強熱心さ」に触れ、4年間の信徒の働きを祝福されました。また「若い人が少ないといわれるが、東北ほど若い修道者・信者が多く、生き生きと働いている」と励まされました。

今回は子育てをしている若い親の世代も参加しやすいようにと、日曜学校のリーダーが中心となり、子ども達のための「ミニ運動会」が紫山キャンパス内で持たれ約20名が参加しました。

昼食交流はカトリック各団体からの出店や売店でにぎわいました。午後から行われたミサでは子どもたちも一緒に、県内各



地から集まった信徒と司祭が心をひとつに祈る恵みを味わいました。共同祈願では、各教会代表が赦し・平和・司祭召命を祈りました。溝部司教から頂いた多くの秘跡、祝福に感謝し、新たな任地に向かわれる司教様を思う深い祈りに包まれました。

閉会后、晴天の中庭は溝部司教様を見送る感涙の長い列「写真上」がしばらく続きました。当日のミサ献金324,000円余はスベルマン病院とタルクに贈られました。

(元寺小路 伊藤 孝)

<シリーズ> 188名日本殉教者列福の推進 京都の殉教者

溝部 脩

初期の頃より日本の宣教師は、京都の宣教を大切にしました。そのころもあり、京都は1614年の迫害開始にあたり、最初に試練を受ける場所となった。司祭や主だった指導者は京都を追放された。それでも熱心な信者は京都に残り、教会を守った。

「写真」殉教するテクラとその子供たち



京都市内を引き回され、六条河原に到着した。十字架にくくりつけられ、火が放たれ、殉教した。総勢52名、内男子26名、女子26名、しかもその中で子供の数は11名。女子供が多いのが、京都の殉教の特徴である。感動的な殉教の場面をこの短い紙面で紹介することは不可能である。拙著「キリシタン地図を歩く」を参照されたい。

1619年1月10日キリシタンの町(ダイウス町)は役人に取り囲まれ、信者は捕えられ、投獄された。7月には京都の信者の中心人物であったジョアン橋本太兵衛とその家族が捕えられた。太兵衛の家族は、妻のテクラと5人の子供であり、テクラのお腹の中にはもう一人の子供がいた。

10月5日、27本の十字架が六条河原に準備された。翌6日、殉教者たちは山車に乗せられ、

聖霊のもたらす一致を！ 溝部 脩司教 高松教区に着座 仙台教区に感謝をのべる



7月18日朝、仙台空港国内線出発ロビーには、仙台在住の6名の司祭と20名の信徒が顔を合わせた。翌日高松教区カテドラルで行われる溝部司教の着座式に参列するためである。梅雨明けした高松市は気温35度の真夏日。カテドラルには補助椅子が目一杯並べられたが、司祭、修道者、信徒で埋め尽くされ立ち席ができるほどであった。全教区から集まった司教たちが祭壇を囲むように席をとる。11時、入祭の歌で着座式ミサが始まっ

て間もなく、教皇様の任命書が朗読され、「神に感謝」の大合唱の後、深堀前教区長より任命書が授与されると、大きな長い拍手が聖堂内に響き渡った。バクルス（司教杖）を手に前任の深堀司教に導かれて新教区長は祭壇中央に進み「写真左上」司教座にゆっくり腰をおろされた。その後、教区の司祭一同、修道者一同、信徒一同それぞれが「司教への従順の誓い」を起立して読み上げた。

横濱教区長・梅村司教は、説教の中で、教会は交わりの家であり、聖体は、私たちを一つに結ぶ一致の神秘です。司教のもとに一つに結ばれ、聖霊による一致が今こそ求められていることを強調された。

溝部司教は、参列者全員に一人ひとりご聖体を授けられた「写真右下」。

閉祭の儀には教皇庁大使、司教団代表、司祭団代表、信徒代



最後に、溝部司教の挨拶があり、その中で司教は「仙台教区の人々、司祭、修道者、信徒の皆さんには大いに助けていただき、深く感謝している。今日仙台から来られている方々からわたしの感謝の気持ちを教区の皆さんに伝えて欲しい」とおっしゃってください、我々一同は涙が止まらなかった。

（八木山教会・岡田謙一）

名古屋教区長・野村司教（司教協議会会長）は、「高松教区の一一致は、日本全体の教会の一一致につながっている」ことを強調され、溝部司教のもと「聖霊による一致」を求めてほしいと話された。

着座式に参加して

一本杉教会・小野敬子
高松教区の深堀司教様から、司牧者としての教区長のしるしである長い杖を渡されて、いつものようにうつむき加減に首をかして立っている溝部司教様の姿は、私の中でイエス様のお姿に重なって見えました。

ご挨拶の中で、3年8ヶ月の仙台教区での司牧を振り返りながら、それまで静かに淡々と話されていた溝部司教様の声が急に途切れ、言葉に詰まってしまった時、司教様が全身全霊で教区の私たちを励まし導いてくださったことを思っ胸が一杯になってしまいました。

ある司教様は、「高松教区の新司教着座は、仙台教区の犠牲の上にあって下さり、また「私たちが溝部司教様をどんな事をしてでも支えていきます」と、挨拶の中で約束してくださった大阪の池長大司教様の言葉に慰められました。高松教区の方々の期待や喜びと、私たち仙台教区の参列者の抱く言いようのない淋しさが交錯した着座式でもあり

ました。

複雑な問題を抱えている教区の着座式らしく、『聖霊による一致』を掲げた溝部司教様に呼応するよう、どなたの司教様も「一致すること」を呼びかけていらつしやいましたが、このことは、単に高松教区だけではなく、すべてのカトリック者に向けられた、強いメッセージであることを感じた着座式でした。

私たちは、仙台教区に残された溝部司教様の「一致」への思いを今一度深く心に留め、そのお心に応えていかなければと思いつながら高松を後にしました。

仙台教区から参列した信徒（後列）



移民 難民に光を!

6月21日22日、難民移住移動者委員会東京教区管区地域セミナーがカトリック仙台司教区センターを会場に行われた。谷司教をはじめ東京



管区内の札幌、仙台、新潟、さいたま、横浜、東京教区から各担当者

ける外国人登録国籍別人員数、その内のカトリック信徒数が報告され、滞在期間にA永住者(結婚等で)B留学生(2~3年滞在)C短期滞在者(出稼ぎ労働者、実習生、学会出席者等)の違いがあることを踏まえた上で司牧を考えていることが報告された。また、母国語で相談にのれるように通訳者を確保していること、英語、スペイン語、韓国語のミサを月一回行っていること、在仙外国籍の子供、日

本との間に生まれた子供たちのための信仰教育(洗礼・初聖体・堅信のための準備等)別の共同体を作らず小教区に参加するよう指導していること、等が報告された。また3月には仙台では初めてインターナショナル・ミサが行われたことも報告された。今後、仙台市、仙台圏において外国籍の人が増えることが予想されるなか、教会として役割も増えていくと予想されるが、教会を越えて、公的機関、NPO、NGO等との協力関係が、ますます求められていくと考えている。

(田中神父)

典礼の霊性を深める

神学顧問 佐々木博

『典礼憲章』の第二章で、「聖体の聖なる神秘」の刷新された部分について述べられています。

そこで、ミサは、司祭がささげ、信者はそれにあずかるというよりは、むしろ司祭と共にささげることであることが、再確認されました。です

共にささげるとミサ

的に参加するように」と強調されています。

まず、ミサは、イエス・キリストご自身が、自分を、天の御父に、パンとぶどう酒の形で、あがないのささげもの

として、ささげる行為であります。ですから、このイエスの自己奉獻を、教会の最高の礼拝行為として行うことが、ミサの本質なのであります。

教会は、司祭と信徒によって構成されている信仰共同体ですから、司祭と信徒が共にミサをささげるのです。したがって、ミサは信者の生活にとって、なくてはならない信仰の基本的土台に他なりません。

仙台教区視覚障がい者「アンジェラスの会」総会

「聖霊がもたらすまことの平和」をテーマに、視覚障がい者アンジェラスの会(会長・八木山教会 大島喜四郎)が、7月19日(海の日)、佐々木博神父(石巻)をお招きして、東仙台教会において、04年度の総会を開いた。



信仰の証し人にならなければならない責任があると話された。さらに、第2講話では、十字架によって神と人との和解を果たされたキリストによって、敵意やわだかまりは取り除かれ、和解、平和、シヤローム(豊かに満ちる)がもたらされると論じられ、癒すことも癒されることも、聖霊によつて、「新しく」されることになければ難しいことを学ばせてくださった。

講話の後、分かち合いがおこなわれ、参加者の生活に共鳴する感想等が話された。

《参加者の感想》

薄井慈恵子さん「神父様のお話から慰めと励ましを受けました。

菅原郁子さん「信仰を見直すよい機会となりました。

神枝米子さん「暗いニュースが多く落ち込んでいました。10歳の時太平洋戦争で葉がなく、今の体になってしまった。今日は、モヤモヤがとれました。

た、佐川(青森)小島(盛岡)三森(八王子)岩崎(長崎)の各氏からメッセージが寄せられた。総会の開始にあたって、亡くなられた会員・福井喜久子さんの追悼ミサがささげられた。第1講話では、現代社会はイエスの時代以上に神を忘れ、神から離れ人間が勝手に行動している。私たちは、今まで以上に

第2回福音宣教推進全国会議から10年

カトリック釜石教会 小野寺 哲

長崎で行われた第2回福音宣教推進全国会議、いわゆるNICE2が終わってから10年になります。

仙台教区からはこの会議に故佐藤千敬司教様を団長に4県から推薦された11名が参加しました。神父様3名、修道女2名、高校教師2名、OL1名、主婦2名に、役所を退職したばかりの私とでした。

会議が終了して解散する前に私たちは何年後かに再会して福音宣教についての自分たちのそれぞれの在り方を確かめ合ひましょうと約束して別れました。

再会はなかなか果たせずにはいましたが、今年の2月5日の長崎二十六聖殉教者の記念日にたまたま私が思い出して再会を提案し、先日、教区センターに参加者のうち6人が集まり、NICE2とその後について話し合いを持ちました。

私たちは、全国会議に出発する前も何度かこうして集まって、

それぞれの小教区で話し合われ

た「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る」について分かち合って全国会議に臨んだことを思い起こしました。あの時は分かち合いの最中にキリストのめしはしばだったことを思い出します。「一人、または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」、が実感として心に深く刻み込まれたものです。

全国会議は、1993年10月21日から24日の日曜日までの4日間、長崎教区センターと浦上天主堂を中心に行われました。日本各地から集まったカトリック信徒が真摯に分かち合った会議の結果は、参加者一同から司教団に答申されました。その内容は、社会、家庭、教会共同体、刷新運動の継続の4項目に大別されていて、今も引き続き宣教活動の基本となっていると思っ

ています。

さて、先日久しぶりに集まった6人の話し合いの中心点となったのは「教会共同体づくり」についてでした。ここでは、NICE2で答申された5項目に沿って話し合われたことを報告いたします。

「分かち合いの理解と推進」について、出席された3人の神父様方から異口同音に言葉による分かち合いにとどまらず、物や時間やお金などを含めて自身自身の痛みをもともなう生き方を分かち合う、このような生き方が福音宣教の重要な柱として定着していくことが大切であり、そのためには、きめこまかな準備、対象や趣旨に応じたよいプログラム、手引きの作成、聞くことの訓練、技術だけでなく霊的な奉仕を担うことのできる進行役(リーダー)の養成が必要なこと、また信徒間のみでなく司祭相互、信徒・修道者・司祭・司教間での分かち合いについて努力していくことがこれからはいっそう必要だ

と話され、みんなでそのことを改めて確認しました。「共感・共有ができる共同体をめざす」ことについて。これからの教会は次のことを優先すべきだと私たちは話し合いました。それは、弱い立場におかれている人々(滞日・在日外国人、難民、少数民族、差別部落の人々、障害者、病者、高齢者、子どもなど)とともに歩むこと、行事中心の運営から脱皮し、福音宣教を優先する小教区共同体へ移行すること、まだ定着していない女性の参画の場をさらに広げること、



現在の刷新の動きを理解しきれずにいる人々を受け入れ、さまざまな事情で教会から足が遠ざかっている人々との交わりを回復すること、その上で、共同体づくりの方針の策定、プログラムづくりなどに意をもちいる必要性があること、などでした。

「現実を識別して生きる信仰者の育成」については、空文化されている部分もあるとの思いもあって、その促進状況に少し不満足感がみられました。

「典礼の工夫」はその後教区においては日々刷新されており、「青少年の信仰育成」については、溝部司教様が在任中いつも青少年とともにあったことが印象的だったことが例としてあげられ、この点ではこれからも期待できるということでした。

私は、全国会議後9年間保育園の園長として、弱い立場にある子どもたちの立場に立つことができ、たくさんの目に見える恵みをいただきました。子ども好きの私にとって平和で幸せな期間でした。また、病者、障害者の団体(カトリック仙台教区病者・障害者団体連合会)に岩手県の協議会設立の際に加入しました。現在高齢者の延長上に病者、障害者が多くおいでになります。私たちの釜石教会では弱い立場の人々のための祈りがミサの中で定着しています。こうして、「共感・共有できる教会共同体づくり」をめざして教区全体が歩んでいるという実感をもちます。

私たちは、NICE2の精神をもとにこれからも生き続けようとして確認し合いました。

= 平和旬間にあたって =

今年も、8月6日から15日まで、日本カトリック平和旬間がやってきた。各地で平和を祈るミサがささげられ、平和への願いを改めて強く意識するこの期間に元寺小路教会において講演会や祈祷会が開催された。

平和憲法を守ろうと 講演会開催

平和旬間を迎えて、カトリック正義と平和仙台協議会主催で8月8日(日)午後3時から5時まで、元寺小路教会大聖堂を会場に講演会が開催された。

参加者は約50名。講師の高田健氏(九条の会・事務局担当)は「私たちは平和憲法の破壊をゆるさない」と題して講演された。背景を想起させ、決して安心できる社会、時代ではないとの認識を示した。



次に、平和憲法、憲法9条が世界に誇れる人間の理想的憲法であって、政府・自民党が憲法の「立憲主義」「法治主義」を崩壊させていることに言及し、この動きの先に国民を欺く憲法調査会の活動と、憲法改正を目指す国民投票法案がタイムスケジュールにあがってきており、有事関連7法案を足場に憲法改正を目指す政府自民党の動きが加速しようとしていることに懸念を示した。

最近、事務所が警察による家宅捜査を受けた経験や、自衛隊宿舎に海外派兵反対のチラシをメールボックスに投函した市民運動家が摘発され家宅侵入の罪状で逮捕された事例や、街頭で平和憲法擁護・海外派兵反対の呼びかけをしていた市民が逮捕されたことなど、警察の取締りが強化されている事例を挙げ、戦前の言論統制を連想させる動きであると警告した。このような時代は、『茶色の朝』注1や、『マルチン・ニーメラ牧師の告白』注2の時代

市民運動により、国民投票の憲法反対多数を勝ち取り、選挙を通して平和憲法擁護の国民世論を作っていくことと訴えられた。世界191カ国の中でイラクへ派兵した多国籍軍は45カ国であり、世界の25%程度の国であって、75%は反対していることに勇気付けられると結ばれた。会場では、仙台市民の参加をうけ、書籍販売や、Tシャツ、ワッペン、クッキー販売なども



行われ有意義な一時だった。(仙台正平協事務局 氏家昭)

『茶色の朝』フランスのベストセラー寓話。(大月書店)

【注2】『マルチン・ニーメラ牧師の告白』はナチスに抵抗して投獄されたマルチン・ニーメラが、「共産党が弾圧された。私は共産党員ではないので黙っていた。社会党が弾圧された。私は社会党員ではないので黙っていた。組合や学校が閉鎖された。私は不安だったが(関係ないので)黙っていた。教会が弾圧された。私は牧師なので、立ち上がった。そのときはもう遅かった」と話した。

平和を求めるキリスト者 合同祈祷会

終戦記念日の8月15日、元寺小路教会大聖堂で、仙台キリスト教連合主催のもとに160人が参加して合同祈祷会が開かれた。この日は、戦時下の体験を5名の方が語ってくださった。仙台青葉荘教会信徒の斎藤潔さんは、戦時中のキリスト教弾圧について、改革派仙台教会信徒、戸田信さんは、戦前アメリカから送られた「青い目の人形」が学校で生徒たちの目の前で焼かれたことについて話された。次

いで、豊屋丁教会の山田虎夫さん「写真」は、実際に戦地で従軍した経験について。宮城学院卒業生の高城悦子さんは、学徒勤労動員の体験について、宮城学院女子大学大学院生の遠藤房子さんは、戦争体験者に対する聴取調査の報告をした。

戦争体験者が年々減っていく中で、貴重な体験を聞いた後、グループに分かれての分かち合いを行い、最後に全員で黙想と参加者の祈り、賛美歌21・49『平和の道具と』を歌い、平和を願って主の祈りをささげた。

雨宮神父様を囲み、聖書が語る「平和」をいっしょに聴く会

7月19日と20日の両日に行われ、東京教区司祭、上智大学神学部教授(聖書学)の雨宮慧神父様を講師に、「聖書が語る「平和」をいっしょに聴く会」が元寺小路教会を会場に開かれまし



た。この会では、平和旬間を迎えるにあたり、救いの歴史の中で、神が聖書を通して語られる私たちの「平和」とはどんなものであるのかを聴きたいと思っ

から有志が集い、仙台中央地区教会連絡協議会、カトリック仙台教区、仙台キリスト教連合の後援を得て開かれたものです。両日も80名近い方々の参加があり、質疑を交えながら熱心に講話に耳を傾けました。第一講話 聖書が説く「行動の原点」では、イザヤ書を中心に、紀元前8世紀後半の中東世界の勢力図をひもときながら、「思い」と訳される「マハシャーヴァー」を取り上げ、神の「マハシャーヴァー」と人間のそれとは天と地ほどの違いがあり、人間のマハシャーヴァーは神の目から見れば、所詮「たくらみ」に過ぎないこと、神の前に聴いて信じて呼び求めて救われることの大切さなどが解き明かされました。

第二・第三講話 アッシリアの圧力の中で平和を説いたイザヤでは、「平和」と訳されるヘブライ語の「シャローム」は「充ち満ちた状態(欠けたところのない状態)」を言い、日本語の意味(戦争がない)よりもずっと広い意味を持つこと、平和は神に尋ね求めるべきものであり、主の熱意への信頼とそれへのねばり強い希求が大切であることなどが示されました。

△お知らせ△これらの思いが語られている「カセットテープ3本組(送料込み1000円)」ご希望の方は、高梨(☎& Fax: 022-287-3796)までお申し込みください。(元寺小路・後藤 藤教)

家庭の福音化をめざして

仙塩地区連合婦人会(あけの星会)総会

6月13日(日)、元寺小路教会大聖堂において2004年度あけの星会総会が開催され、仙台と塩釜の8教会より、133名が集まった。

1963年の創立以来、神様のみに添って活動を続けてこられた先輩方に敬意と感謝を表し、今年度も一つの教会として心豊かに交わり、共に行動していけるよう、溝部脩司教様の仙台教区司教叙階時の「平和のきずなで結ばれて、霊によって一致を保つよう努めなさい」のこ

とばをもつて総会を開会した。

「ヨハネ・パウロ 世の祈り」で始まり、議案は全て承認され、新たな気持ちで歩き出すこととなった。

担当司祭の佐々木博神父様による講演のテーマ「家庭の聖化・福音化」に、今回初めて男性信徒方にも呼びかけたところ、多数の参加と共に、未信者の方にもお越し頂けたことは、大変喜ばしいことであった。

講話の中で、佐々木神父様は、「神が結び合わせて下さった夫婦と家庭を、人は離してはならない。家庭は神聖な共同体。家

庭が聖化される手段として

家族が一緒に祈る 聖書の分かち合い 教会の典礼活動に家族ぐるみで参加する家族は相互に聖化し、子供は家庭の中で活発に両親の聖化に寄与する。信者と



信者でない夫婦の場合でも互いに聖なる者とされる。家族全員

の愛と一致の協力が、救い主の生きた存在と、教会の真の本質を全ての人々に示すこととなる。家庭の福音化の原点は、私たちが聖霊によって日々新しくされていく体験であり、イエスが山上で教えられた全く新しいものの見方、考え方ができるようになることである。私たちは日々聖霊に満たされながら福音化の道具として、この全世界を変えていくことができる」と話された。

また5月に開催された、日本カトリック女性団体連盟30周年記念長崎大会参加者からは、各地から集まった700名が、基本テーマ「家庭・召命・いのち」と、大会テーマ「平和」わたしから始まる地球の平和について学び、分かち合う中で、家庭の平和から全てが始まることを認識した等が報告された。

マリア様に倣って愛と奉仕に努めようと「日力連の歌」・ロザリオの祈り・聖歌「みはは」を

捧げ、感謝の中に総会は閉会した。当日の献金は溝部司教様へのお饒別、スperlマン病院へ贈呈した。(阿部正子)

NHK教育テレビ

「この時代の」に山浦氏出演 山浦氏出演

一昨年、NHK教育テレビ「この時代の」で「ケセン語で読む聖書」として全国に紹介されたケセン語訳聖書についての一時間番組の、新しい続編が放送されます。四つの福音書を全部ケセン語に翻訳して、全体として見えてきたものについて、主に「ヨハネ」を中心にして、まとめたものです。できるだけ多くの皆様に御覧いただきたいものと存じます。

NHK教育テレビ「この時代の」

「ヨハネからのたより ケセン語訳聖書の世界」 出演・山浦玄嗣(カトリック大船渡教会信徒)

9月5日(日)午前5時~6時
9月12日(日)午後2時~3時 (再放送)

「今、ここに…」

仙台教区 神学生

坂本 耕太郎

神学院入学試験の科目のひとつに小論文がありました。テーマは「なぜ司祭になりましたか」というものでした。

私はルカ福音書の7章36節からの部分を引用して、「五百デナリオンの借金を帳消しにしてもらったら、どちらの人が

多く愛するか」について書きました。

あれから4年以上が経ち、思うことは、五百デナリオンどころか、すべてが自分のも

招き「ここにきて」①

のではなかったのだということに気がつきました。

今朝、神学院でのミサの時、「今、ここに」いることについて感謝しつつも、不思議だ

なあと感じています。

召命を当然と思ってしまうとき、何か違ったものが入り込んでくるのかもしれない。迷いのうちにも、不安のなかにも、悲しみのときも、苦しいときも、きつと感謝できるよう、今日もミサにあずかります。

確かに私は、たくさんゆるしていたいただいた者ですから。

各地から

青森 八戸塩町教会

ワンコインボランティア

喫茶「シャローム」

日曜日の朝、ミサに訪れる人々を優しく迎え入れてくれる、

聖歌隊の歌声とほのかに漂うコーヒ

ーの香。今回は、日曜日だけ営業される喫茶「シャローム」

についてご紹介いたします。現在久慈教会所属の高橋さんの提案で

始まったこの喫茶店。現在は婦人会の方々によって営業されて

いますが、ミサ後の憩いの場として、また、信徒の親睦の場と

して無くてはならない存在になっています。一杯百円のコーヒ

ーを飲みながら、一週間の出来事や近況報告など会話が弾みます。

ミサ後の営業ということもあり、時には有志の方々による

豚汁やおにぎり、カレーライス等のメニューも登場します。こ

の喫茶「シャローム」には、もう一つの大きな役割

があります。



す。それは、売上金が「カリタス八戸」に寄付され、地域社会の恵まれない人々の為に使われているということ。一杯百

円のコーヒ、ワンコインボランティア。一度おいで下さい。

(里村)

宮城 巨理教会

巨理教会の教会日誌によると

03年のミサの平均参加人数は

27名、全信徒がお互いを知っている

少人数の教会です。90年に巨理教会は、

県南4教会の共同宣教司牧地区になり、

今までのように司祭にすべてを依存する

体質から信徒一人ひとりが「私たちはお客様ではない」との考

えのもとに、「一人一役」で各自が役割を分担しています。

少人数ですので、皆で力を合わせて活動しています。

パッチワーク毛布の会は17年間

パッチワーク毛布を縫い、1120枚

モインドのカルカットの路上生活者に送りました。

年2回発行の教会報「わかい」は、

みんなに寄稿していただき24号になりました。

幼稚園の卒園児を集めて、「子供のつどい」

を行うなど、元気のある教会で

新米神父行状記

川崎 忠 紀

<お弁当>

先日、用事があって〇教会へ出かけました。

お昼は隣の幼稚園で食べることとなり、Y神父様お手製のお弁当を持って教室に入ります。短い自己紹介の後、四・五人ずつのテーブルの一つに入れていただき、楽しい昼食の始まりです。

あっという間に子供たちのおしゃべりの中へ。牛乳パックの開け方から始まって、名前当てやお誕生日当てなどなど、次から次へと話題が飛んでいるところへ、離れたテーブルから一人の子が自分の食べかけのお弁当を、黙って見せにきます。1/3ほど食べていたでしょうか。「よく食べたね」と言うと、喜んで自分のテーブルへ帰って行きました。また少ししてお弁当を見せにきます。「オー、食べたね」と。また喜んで自分のテーブルへ戻ります。それを何回も繰り返すこととなりました。

初めは、何なのか分からなかったのですが、ほんのチョットずつお弁当が減っているのに気づいて、「僕、こんなにがんばって食べてるよ!」というのを見てもらうために持ってきているのだと思いました。チョット見ただけでは、全く分からない量の変化です。

この出来事は、僕と神様の関係もそうなのかなと思いました。神様から見たら僕の一生懸命は、「え、何?」に見えるのかなと。そう思ったら肩の力がチョット抜けて、気分が少し楽になりました。



す。

現在は、

教区に申

請して施

設設備協

力制度の

支援をい

いただき、司

祭・信徒館

の改修工

事と門扉および外周の整備工

事を行っています。

主日のミサは11時からです。

例年10月になると巨理名物「はらこ飯」の季節になりますので

ぜひ巡礼にお越しください。

(長嶋)

福島 会津若松教会

聖堂の修復・子どもの集い

当教会御聖堂は明治45年に

建てられ、その後何度か外壁の

塗装が施されました「写真」。

今回の工事は、外壁の塗装・

窓枠・ステンドグラスの配色替

え等々です。

教会は白く輝く外壁に生まれ

変わり、ステンドグラスの配色

が、よき祈りへと導いてくれま

す。皆さんぜひとも当教会へ巡

礼にお出でください。

8月1日、猛暑の中、夏休み

に入った子どもたち、板垣神父

様はじめ十数名と父母で、「子

どもの集い」を行いました。ミ



サでは、ハンドベルの美しい音

色や賛美の歌声が御聖堂一杯に

響いていました。ミサ後は、カ

レークツキングやネイチャーク

ラフトで十字架を作り、ゲーム

を楽しみ、子ども達の笑顔が輝

いていました。育てることで、

育てられていることを実感し、

クリスマ

スでの再

会を約束

して感謝

のうちに

散会しま

した。

(岡本・

菊池)

二戸教会・シュトルム神父逝

二戸教会担当司祭 ゲオルグ・シュトルム神父(ベトレヘム外国宣教会)は、7月29日帰天された。享年89歳。葬儀・告別式は8月3日(火)盛岡志家教会で行われた。

シュトルム神父は1915年

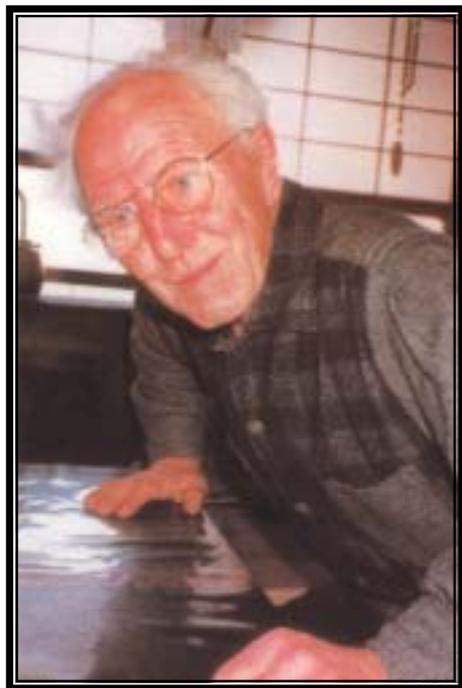
スイスに生まれ、1943年司祭に叙階され、中国宣教活動を経て1952年に来日。大籠・水沢・花巻での宣教活動をへて1959年から二戸教会で司牧活動をするかたわら、自然環境を守る活動に熱心に取り組んだ。

人を愛し、郷土を愛し、自然を愛した同師は、多くの人々に自らの行動を通して神の福音を伝えた。

二戸の灯、シュトルム神父の死を悼んで

志家教会 高橋章浩

二戸市長嶺の「ロザリオ堂」に、青い目のスイス人神父シュトルム師の姿をお見かけすることもなくなってしまう。農民



神父と親しまれた神父様は、「かこべ」(背負いかこ)

を背負い、自転車

をこぐ今では珍しいお姿で、山や畑

に通っていた。神

父様の日常は贖罪と愛の業とに

精進し、山小屋のような家に住み、清貧を旨とし、自給自足の

からご自分で育て上げたもの。

一方では、音楽を愛し、1960年にはご自分の作曲による

聖歌集「バイブルソングス」

を音楽の友社から出版された。

深い信仰と祈りがこめられた歌は今でも私の心を清めてくれる。

2000年には「若手ふるさとづくり奨励賞」、「第11回農

民文化賞」、2001年「二戸市

制20周年記念篤行者表彰」、2002年

「若手日報文化賞」

などを受賞され、農業指導の実績と努力が評価された。

著書には「子山羊とフランシス」(若手日報社)、「幸せの種」(信山社)がある。

詩をつくり、木彫をし、二戸周辺に野生する植物画を描いた。また、今や残り少ない茅葺屋根の農家を描いた「青い目に映った茅葺の詩情」は最後の作品となった。

感謝の言葉

東京 聖家族寮 大林 瑠奈

シュトルム神父様、あなたは、私が受洗してから、あなたの側

を離れるまでに一年間、私に深い愛を注いでくださいました。

ほぼ毎日、ミサに通う私を、夏

は庭のマリア様の前でロザリオを唱えながら、冬は薪ストーブ

を焚いて待っていてくださいました。ミサ後は、家政婦の中野

さんと三人「写真」で自家製のパンとジャムで朝食。しばらく

すると神父様は聖務日課を歌う、それを聞きながら新聞を読む私。

しくて、申し訳なくて泣けました。この日から13日間、あなたの傍らに付き添わせていただきながら、私は美しい黙想にあずかっていたように思います。過去を思いめぐらし、ベッドに横たわるあなたからその生き方を観想していました。そしてこれからも黙想し続けることでしょうか・・・。

「御国に行ったら私はたくさん働くことができる」とおっしゃっていたシュトルム神父様、天国では大忙しですね。

【短歌】シュトルム神父を思う

上堂教会 黒澤 勉

枕辺にロザリオのあり臨終の

苦しみ救う大なるもの

博学の深き思索の神父なり

若き日に会う我の幸せ

二戸市の植物図譜を完成し

「」が古里と語りし神父

信者らの救いをひたに祈りつ

己を捧ぐ聖き生涯

茅葺の屋根の民家を描きたる

神父の心推し量るべし



活動紹介

仙台ロゴス研究所

(カトリック北仙台教会)

本研究所は、戦後、狐小路に置かれた「学生の家」を母体にして、1971年、故佐藤千敬神父(司教)によって現在の北仙台教会の敷地内に開設された。

「ロゴス」の名は、ヨハネ福音書第1章の『初めにみことば(ロゴス)があった。みことばは神とともにあった。みことばは神であった。』に由来する。神のみことばを研究し、その研究をとおして、信徒同士だけでなく社会の人々とディアロゴス(対話)することが目的であった。

私の気分転換

聖パウロ女子修道会

Sr. 深堀千代子

普通、80歳になったら引退なのでしょうが、修道生活に引退はありません。最後の日まで、私たちは、できる範囲で使徒職を果たします。たとえ最後の使徒職が苦しみだけ

の使徒職であったとしても、
ところで、現在の私の使徒職は、修道会の歴史資料を整理することです。そのため、

2001年に北仙台教会では、献堂50周年を記念して新しい信徒館を建設し、信徒の間だけでなく、地域にも開かれた施設となつたが、併設された研究所の在り方がこのところ課題となつていた。

現在のところ、カトリック講演会や講座を開催する、黙想会や研修会を企画する、付属の図書室を整備し、本の貸し出しや教会・教会史関係の記録の収集と保存を図る、などが検討されている。

この度、第1回の事業としての講演会を、9月26日(日)午前11時より開く。特別養護老人ホーム・パルシア施設長の折腹

パソコンも習い、今、パソコンを駆使して、と言いたいところですが、普通に使える程度で、何とか使命を果たしています。

こんな私の気分転換は、パソコンのきれいなEカードを、霊名の祝日を迎える知人やシスターたちに、お祝いの言葉と祈りを込めて、喜びを共にして送ることです。これは、とても楽しい気分転換です。

皆さんもなさつたら、楽しいですよ。



実己子さんから「高齢期を豊かに生きる」と題して、よりよい高齢期を過ごすための方策、特に介護が必要になったときのサービスの有効活用など、パルシアでの実践をとおしてのお話しをいただく。多くの方々の参加を期待している。

なお、研究所の代表は江刺俊光氏、事務局長は京野巖氏で、運営委員には他の教会からも参加している。指導司祭にはラトゥール神父があたつており、今後毎月1回会合を開き、企画・運営について話し合い、幅広く活用できるよう努めていくが、多くの方々の要望が寄せられるのを待っている。

修道院紹介

(佐藤英樹)

善き牧者修道会 仙台修道院
正式名「善き牧者愛徳の聖母修道会」仙台修道院は、1935年ドミニコ会士、函館教区長デユマ師に招かれカナダ管区より3名のシスターが来日、仙台の地でスタートしました。
今から69年前、仙台でスタートしたものの。世界大戦中、カナダ人シスター達は敵国人として抑留、修道院は危機的状況になりましたが、神は常に見守つ

ておられ、戦後、県・市の強い要望で養護施設「小百合園」が、次いで地域の要望で「さゆり保育園」を開設。

現在は混乱した社会状況の中で傷つきケアを必要とする少女たちの自立援助施設「やまびこ」DV(ドメスティック・バイオレンス)に苦しむ人々へのためのシエルター活動等、それぞれのニーズに応え励んでおります。

私達は「一人の人間は全世界より重い」との創立者の言葉のもとに、通常の三誓願の他に「熱誠の誓願」を宣立し、日本では大阪・横浜・長野の各修道院と、各地域のニーズに応え、パストラル・ケアを始め、児童のケア、滞日外国人のケア、DVに苦しむ人々への協力等、社会の底辺



黙想会の折に

で苦しむ人々への奉仕に努めております。
(春山智子)

編集部から

仙台教区報の発行を再開したのは、2001年6月20日(140号)でした。溝部司教様が、強く望まれた広報委員会の立ち上げでした。それから3年3ヶ月が経ちました。なかなか原稿が集まらずに苦勞した時期もありましたが、最近では、皆様からぜひ教区報にと投稿をいただき、紙面に収めるのに苦勞するほどです。実にうれしい悲鳴です。溝部司教様のご意向がまさに軌道に乗ってきたものと思っております。これからも編集委員会を悩ますほどの原稿をどしどし送ってください。
聞くところによりますと、高松教区でも早速教区報とホームページを作成すべく準備を始められたということですので。
高松教区の着座式に参列して、同じ牧者に導かれた仙台教区と兄弟になったと感じました。兄弟教区を是非応援したいと思います。
着座式の時の司教様方のお話は、仙台教区のホームページに掲載しましたのでご覧下さい。
(岩井)